

アジアの孤児

呉濁流



日本統治下の台湾

アジアの孤児
呉濁流

新人物往来社

呉濁流（ごだくりゅう）

1900年台湾に生まれる。台北師範学校卒業後、教員生活20年、記者生活7年を経て、現在、作家。

著書（日本語）『夜明け前の台湾』
『泥濘に生きる』（ともに社会思想社刊）



アジアの孤児——日本統治下の台湾 呉濁流◎

昭和48年5月25日発行

定価 980 円

発行者 菅 真人 発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビルディング

〒100／振替口座 東京151643／電話 (03) 212-3931

印刷 東京印刷株式会社／製本 美成社

書籍コード 0095-40077-3306

自序

世界は今や、灰色に変わった。しかし、その底流をさぐれば恐るべきものがないとも限らない。

歴史は常に繰り返す。歴史が繰り返す前に、われわれは正しき史実を究め、歪められた歴史によってつくられる運命から逃れる方法を講じなければならない。それ故、われわれは常に過去の史実に徴して教えを求むべきである。

『アジアの孤児』、この小説は戦時中、すなわち一九四三年に起稿し、一九四五年に脱稿したものであって、台湾における日本統治の史実の一部分を背景にして小説を綴ったものである。ただし、当時、何人もあえて筆にしなかった史実ばかりであって、これを忌憚なく、ありのままに描写したものである。

そもそも胡太明の一生は、この歪められた歴史の犠牲者であって、精神の住み家を求めて故郷を離れ、日本にさまよい、大陸にも渡ったが、どこにも彼を安住させるだけの楽園がなかった。で、彼は一生悶えて、光なき憂鬱を覚え、絶えず理想に憧れ、常に理想からつき離され、ついに戦争の苛酷な現実には遭って、もろくも一時は発狂してしまった。

ああ、胡太明はついに発狂した。

心あるものよ、誰か発狂せずにいられようか。

ここまで書いて筆をおくつもりだったが、何となく執筆当時のことが思い出されて書き足らない気がする。ここで当時の状況を一言しよう。

一九四三年からの戦いは日本にとっては喰うか喰われるかの戦いである。そして極端な戦争政策を遂行し、ために日本人は自然に時局便乗者と非便乗者とに分かれ、前者は戦争を謳歌し、後者は常に非国民と嘲けられていた。同時に、台湾人にも同じように皇民と非皇民の区別ができてしまった。

この矛盾の中に、不平、不満、猜疑、嫉妬が起こり、その隙にデマが百出した。そのうちにマニラがとられた。いったい、アメリカ兵はどこに来るだろうか。香港、台湾、琉球など、そのいずれかはねらわれる。万一、台湾に上陸されたら、日本の軍部は台湾の知識階級をどう動員するか。それは問題であった。知識人はそのデマにおびえて、戦々兢兢として生きた心地もなかった。

しかし、筆者はその恐怖よりもこの小説を完成しなければならない衝動にかられたのである。当時、筆者の住んでいる家の前には北警察署の官舎がずらりと並んでいた。その中には顔見知りの特高も二、三人いた。この小説の第四篇、第五篇を書くのにすこぶる都合の悪い所で、したがって疎まざるを得ない。しかし、案外、燈台もと暗しで、かえって安

全だと思って別に場所を換えなかった。けれども万一の場合にそなえて、細心の注意だけは払って置いた。二、三枚書いては勝手の炭籠に隠し、これがたまると田舎の故郷へ疎開するようにした。

今となってみれば何となく馬鹿ばかしい感じもするが、当時は実にうっかりできない時代で、発見されたら最後、事の良し悪しを問わず、直ちに反逆者か反戦者として簡単にかたづけられてしまうのであったろう。

どうせ歴史は必然的に動くから、今さら、あえて無意味な犠牲をするも阿呆らしい。そうかといって空しく時の来るのを待つのは辛い。加うるに空襲が熾烈になって、いつどこでどうなるやら全く予想がつかない。それで、この小説の完成を急いだのである。今になってみれば、その時書いて置いてよかった。今ではこのようなものをとて書けそうにもない。たとえ書いたところで、当時の実感がなかなか滲み出てこない。したがって作品の質が異なっていることだろう。この小説の良し悪しは別として、第四篇、第五篇は筆者にとっては命がけの作品である。

このたび、この小説がいよいよ日本で出版できるようになった。筆者のよろこびはまた想像以上のものがある。もしもこれを読んで、読者にとってどこかにプラスになるものがあるならば、畢竟、出版を取り計らってくださった親友上野重雄、中沢富美雄両氏の友情と犠牲の賜といわなければならぬ。

終わりに、本書の出版に関し、十年一日のごとく筆者を励ましてくださった工藤好美教授の精神的支持には目頭が熱くなると共に、先生の文学愛好精神には頭がさがる次第であります。

一九五六年一月十日

序於藍園 吳 濁 流

目次

第一篇

苦棟の花の咲く頃……………	12
雲梯書院……………	17
古きもの新しきもの……………	27
濁流の中へ……………	36
久　　子……………	42
思慕たちがたく……………	47
故郷の山河……………	53
嵐の季節……………	57
彭秀才を葬う……………	62
愛と告白……………	67
青春の慟哭……………	72

波濤を越えて……………	73
-------------	----

第一篇

日本留学……………	78
異郷の花……………	84
ふたたび故国へ……………	89
救いなき人びと……………	92
阿玉の悲しみ……………	100
昏迷と彷徨……………	104
新生活……………	106
流離転々……………	113
大陸の呼び声……………	117

第三篇

紫金山の見える家……………	130
淑春……………	145

第 四 篇

母の死	231	その後に来るもの	154
回復期	225	愛情は回帰する	158
この悲惨	216	相 剋	160
強いられた征途	210	一 夜	172
戦いの陰に	203	風暴の前	176
暗い故郷	196	囚われの部屋	181
		脱 出	188
		さらば大陸	191

虐げられる青春……………239

再　　会……………242

第五篇

日米開戦……………248

新たな戦場……………250

愚かしき銃後……………257

范の操志……………261

虎狼の府……………273

皇民派の悲哀……………285

ある決意……………289

犠　　牲……………293

狂　　乱……………297

再刊に際して……………303

解説 植民地体制と「知識人」

——吳濁流の世界……………305
戴国輝

アジアの孤児

第一篇

苦棟きんたんの花の咲く頃

ボカボカする春日を背中に受け、老阿伯ローアーベ（おじいさん）に手をひかれた胡太明は、踏石を一つ一つ数えながら、裏山への小径を上っていった。径の両側は雑木林で、名も知れない小鳥が二、三羽、枝から枝を渡りながらチチと短く囀っていた。踏石に敷きつめられた上り勾配の小径は、無限につづくように思われた。あえぎがひどくなった太明は、いつか踏石の数をかぞえるのをやめてしまった。気がつくと、祖父からおくれてしまっていた。老人は坂の中途のいくらか平らな場所で、おくれた太明を待っていた。太明はフウフウ言いながら、やっとそこまで上りついた。

老人が長い黒い頭布をほどこいて、頭に風を入れているので、太明も真似をして、まるい碗帽を脱ぎ、ひたいの汗をぬぐった。汗ばんだ弁髪きんの根もとがムズ痒かったが、風がすぐ汗をひっこませてくれた。老人はそこで一服するつもりらしく、ほどこいた頭布をまた頭に巻きつけると、よいしょ、と石の上に腰を下し、愛用の長い竹の煙管きんに燐煙をつめ、太明に火を点けさせると、うまそうにシュウシュウやりはじめた。そのシュウシュウという音は、太明には聴きなれたものだった。それを聴いていると、あたかも長い物語がほぐれ出す前の魅惑的な前ぶれのように、太明はふしぎになつかしい気持の中につれこまれてゆくのだった。

老人は、いつときはあるかな回想にふけるようだったが、煙管の雁首をボンと石にはたきつける
と「変わったものだ。このへんはおじいさんの若い頃は、とてつもなく大きな松や樟や榎の木の
大森林だったのだが……おまけに、藤や蛇木が生い茂って、まっぴるまでも狸やリスがのさばっ

ていたものだ。よほど胆の太い男でも、なかなか一人ではここを通れなかった。ところがね太明、おじいさんは二十歳はたちくらいのある日、一人でここを通りかかったのだ」

その坂は昔、土匪や泥棒の抜道で、もし途中で牛でも盗まれようものなら、金輪際持主の手に戻らなかつた。穿竜頸ツクリンギヤ(坂の頂き)はもつとも恐ろしい場所だつた。誰かがそのあたりで賊に殺されたとしても、蕃地が近いためにその犯行はすべて蕃人の所為に帰され、官憲の手も及ばないのがしきたりだつた。ところが老人はある日、無謀にも一人でここを通りかかった。まだおそれを知らない若者だつた。坂の途中まできた時、なんともいえない冷涼の凄気をおびた一陣の突風が、突然彼におそいかかった。ああ、とさけんで、本能的に身を庇つたが、眩んだ眼の前を、黒い砂塵のようなものが遮り、からだはすくんだように動かなかつた。ようやく正氣づいて足もとを見ると、大きな胴体をしたあまがさ蛇が横たわつていた。慄然として二、三步しりぞき、かたわらの石を拾つて構えたが、いったいどうしたことだ！ 蛇はすでに痕跡もない。それはわずか三、四秒のあいだの出来事だつたが、あまりの怪奇さに、彼は持つていた石をくさむらに投げたまま、しばらく呆然としていた。それから何事もなく、強気な彼はそのまま目的の場所に行つて用を足した。ところが帰路、さっきの場所にさしかかると、くさむらに投げたはずの石が、ちゃんと道の真ん中に安置してあつた。老人はなんともいえない悪寒に背筋をなでられ、夢中でとぶようにして家に帰つてきたが、そのまま発熱してしまつた。頭が重く、腰が抜けたように痛んだ。

老人は「鬼」に出会つたことを信じていたが、わざと「鬼を払う」ことはしなかつた。毎日高熱にうかされながら、ののしつた。

「鬼め！俺に会ったのはお前のほうからだ。金銀財宝が欲しければ、もっと運の悪いところへ行け。俺はやらんぞ！」

それは老人のたたかいだった。しかし、鬼は執拗に去らなかった。母親が心配して、占いに頼んで鬼を払うことにした。鬼というのは、なんでも赤脚大頭神だった。金紙一千、銀紙三百、線香五本、大身白虎一对、御飯一杯、汁一杯、卵一個を用い、病床から百二十歩の地点までおくり出した。そして金銀紙を焼いてやったところ、翌日、熱はケロリと下がった。鬼に何もおくらず一週間頑張り通したから、鬼のほうで根負けしたらしい、老人はそう言って豪放に笑った。

追憶談が終わると、老人は

「さあ、行こうか、太明」

よいしょ、と腰をあげ、また先に立って歩きだした。穿竜頸を越すと、視界がばあつとあかるくなった。眼のさめるような新緑の茶園のはてしない展望がそこにあった。そしてはるかな緑のはてに、中央山脈が洗ったようなすがすがしきで横たわっていた。たったいま聴いた、穿竜頸にまつわる気味のわるい昔話を、あとかたもない一場の白昼夢と化し去るように！

と、想思樹の陰から、若い女たちの唄声がきこえてきた。茶摘み女たちの、卑俗な山歌だった。太明たちの足音で、唄声はピタリとやんだ。ある種の期待が、彼女たちの口を噤つぶませたのだ。ところが、相手がわかると、女たちは

「フン、老阿伯と、子供か」

失望をあらわに示し、はしらない戯れ口をきき合ったり、淫らな笑い声を立てたりした。

「ずいぶん風儀の悪い所だ」